

木森山水道

挿絵:sue

二次元ドリームノベルズ

健 昂
優 良

ビビッド VIVID GIRL ★ ガール

淫らな体育祭で
寝取られる
淫紋ヒロイン

試し読み版

18
未 満

かがやき
★輝ホミコト
ビビッド・ガール

元気いっぱいなスポーツ大好き
巨乳女子校生。
そのスポーツ愛を見込まれて、
地球からスポーツを奪おうとする
プリンス・アウターに対抗するため
健昂優良ビビッド・ガールに
変身する力を得る。
恋愛ごとにはまだ疎いものの、
幼なじみの元喜一郎のことが
無意識ながらも気になっている様子。

もと き いち ろう
★元喜一郎

ミコトの幼なじみ。
優しいゴリラ顔の体育会系で、
ミコトには異性としての
好意を寄せている。

ぞら の おう じ
★宙乃王子

最近転校してきたミコトたちの
クラスメイト。
甘いマスクの持ち主だが、
ゴリマッチョでスキンヘッドという
いてたちで雄としての色気も
たっぷり。



登場人物紹介

CHARACTERS

目次 CONTENTS

- 5 プロローグ
- 9 第一種目！
恋をするより地球のスポーツを守りたい！
元気全開！
健昂優良ビビッド・ガール誕生！
- 53 第二種目！
体育祭でドキドキの雪辱戦！
淫らな「玉入れ」はカレとセクシー王子と
処女【淫乳】オッパイで！
- 113 第三種目！
カレとの絆と心のキレツ！
淫らな「ムカデ競争」でナカイキしまくり！
ネトラレ【淫穴】初体験！
- 253 第四種目！
地球のスポーツを守るより
敵と子作りセックスしたい!？
最後の淫紋！
性欲全開「クラス全員リレー」！
- 349 エピローグ

★ホイッスル

異星から来た美少女妖精。
ミコトにビビッド・ガールに
変身する能力を授ける。

★フリンズ・アウター

地球からスポーツを奪うためにやってきた
異星の王子。
ミコトたちの体育祭をスケベに改変したり
ミコトに淫紋をつけたりするが、
その目的と本体とは……？

健 昂
優 良

ビビッド
VIVID
GIRL
ガール
淫らな体育祭で
寝取られる
淫紋ヒロイン

健 昂 良
優 良
ビビッド
VIVID
GIRL
★
ガール
淫らな体育祭で
寝取られる
淫紋 ヒロイン



第一種目!

Excellent beat VIVID GIRL

恋をするより地球のスポーツを守りたい!

元気全開!

健昂優良ビビッド・ガール誕生!

「はあ……体育祭マジだるいわー」

と、急に陰鬱な声が聞こえてきた。

「え！」

気の置けないスポーツ仲間と体育着でジョギング登校し、体育祭参加に消極的だと思われたクラスメイトの豚野の真意に安堵した輝木ミコトは、驚いて彼を見る。

だが、豚野ではなかった。彼はぶんぶん頭を振って、自分ではないと訴える。

「体育祭というより、スポーツすること自体がメンドイわあ……」

「スポーツなんて、なにが楽しいんだよ……」

なんと、なにも言わずに体育着姿で登校していた周囲の学生どころか、通勤途中のサラリーマン、ゴミ出し途中の主婦、朝の散歩をしていた中高年まで——年齢や立場に関係なく、付近にいる全員が、陰気にその場にへたり込み、スポーツをけなしているではないか。「な、なんなのこの異常すぎる状況はっ」

ミコトは目を白黒させた。

しかも異変は加速する。

「言われてみれば、確かにそうだ。体育祭なんてタルイだけじゃん……」

「わ、豚野くん！」

ぼやきはするが実は楽しみと言ってくれたクラスメイトも、同じくしゃがみこんだ。

「だよねー……疲れるだけで、いいことないのに……」

「勝った負けたでギスギスするし……」

「そんなんで一喜一憂するのはバカらしいよ……」

「なんかもらえるわけでもなし……」

「あれ……皆でいい汗かいたからって、それがなんだっけ……」

さらには、ミコトと一緒に登校していた、スポーツ大好き仲間の皆も、そのリーダー的存在であり、彼女の幼馴染みである元喜一郎までもが、遅しくて健康な体躯たいくに似合わない、死んだ魚の目になり、冷たいアスファルトの道路で体育座りを始めてしまう。

「そんな、皆が……一郎もなの！ 一体、なにが起きているのよ！」

無事なのは、困惑を深めるミコトただひとり。

いつの間にか、あんなに澄み渡っていた青空は、ドス黒い曇天に変わっていた。

清々しい朝の空気は、何十年も捨て置かれた廃屋みたいに、退廃的に淀んでいる。

そのときだった。

「ハーハッハッハッハ！」

近くで一番高い家の屋根で、何者かが高笑いしている。

「地球人どもよ、愚民どもよ、貴様らに崇高で神聖なスポーツは似合わない！ このプリンス・アウターが、惑星ヘルスの王子が、宇宙スポーツ神に代わり、取り上げてくれる！地球上からスポーツという概念を消してくれるぞ！」

「な、なんなのあの変態コスプレ男は！」

ミコトは目を剥く。屋根の上で叫んでいるのは、周囲の状況よりも異常な人物だった。

長身で黒いマント姿。目には、羽を広げたチョウを思わせる黒いアイマスクをしている。服装は半袖短パンだが、西洋の王族の盛装とも、どこかの軍隊の幹部の正装ともつかない豪華なデザインだった。

「わたしはマンガやアニメも好きだけど、あんなキャラは見たことないわ……」

視力2.0を誇るミコトは、百メートルほど離れている相手をまじまじと見る。

「あ……よく見ると……格好も言ってることも変態だけど、身体付きはすごい。プロの格闘家みたいにもキムキじゃないの……あんな人がどうして変質者なのかしら……」

「失格ですー！」

ぽうぜん
呆然と呟いたミコトの耳元で、女の子のやかましい怒鳴り声があった。

「わ！ な、なんなの急に……え……」

声の主の姿を認めて、ミコトの目が丸くなった。

だがそれは一瞬で、彼女の頬が目一杯緩む。

「きゃわたくん！ な、なんなのよこれ〜？ 可愛すぎるう！」

謎の存在に今にも掴みかかりそうに、両手の十指をワキワキ動かしながら、うつとりした目で見つめる。

ミコトは可愛い物も大好きなタチなのだ。

唐突に現れたそれは、畳みかける異常事態を忘れる位に魅力的だった。

「また失格ですー！ あたしはコレなんて名前じゃありません！ ホイツスルといいます！」

ホイツスルと名乗った彼女は、キンキン声が初々しい若い女の子。

どうやら、間違えると失格と言うらしい。

外見の年齢はミコトと同じ位か。

透き通るような美白肌が印象的で、元気な性格が滲み出る端正な顔立ちの、金髪碧眼。

お人形のように可愛いのだが、長い金髪をお下げにしているだけでなく、ハチマキに体育着にブルマに運動靴という出で立ちをしている。

醸し出す生命力が強く、スポーツ好きには強い親近感を覚える格好であることから、ミコトにはとても魅力的に見えた。だが、謎の美少女は絶対に人間ではない。

それというのも、身長が極端に小さく、タバコの箱をようやく抱えられるかどうかという、手のひらサイズな上に、コットンの体育着の背中に走るスリットから、四枚の羽を生やしているからだ。

昆虫じみた薄く透明の羽は、彼女の動作に合わせて鳥の翼みたいにパタパタ動いているのだが、その度に虹色にグラデーショナルしている。

「人間の言葉を喋るこの子……ホイッスルって、もしかして妖精！」

「またまた失格です〜！」

わめいた妖精は、針みたいに細い人指し指を、ミコトの鼻先に力強く突きつけた。

浮いているくせに彼女の羽は止まっており、ただ七色に光っている。

超常的な存在と言う他ない彼女は、気の短い女子校生みたいに説教してきた。

「正確には、地球の伝承にある妖精ではなく、あたしの母星である惑星ヘルスの人種なのですが……妖精と呼んでも構いません。その方が可愛くて神秘的ですから」

「あ、あたしの星……！ それってまさか」

「そう。あたしは地球外惑星の者なのです！ あなた方の言い方をすれば、宇宙人ですね」

「宇宙人！ ……信じられないけど、妖精みたいな生き物なんて地球にいるはずないわ」
「もっと言えば、あそこの奴。屋根で高笑いしてる奴と同じ、ヘルス星の者なのですよ」
「え！ サイズがぜんぜん違うじゃないのっ」

「単なる種族の差です……今はサイズのことより、あの高飛車変態です……あいつは星の王子なんですけど、ろくでなしで……苦勞して星屈指の運動能力を手にした自分は、劣る者、すなわち、怠け者で弱者という罪を背負う者にはなにをしてもいいんだと、傲慢でゲスな考え方をして、気に入らない星の住人からスポーツを奪って歩いているのです！」

ホイッスルが握り拳を作って主張すると、ミコトは唾を飛ばして叫んだ。

「なんて奴なの！ 地球人にもそういうサイテーな奴はいるけど、許せない！」
「でしょでしょ！」

ふたりは意気投合し、怒りで鼻息を荒らげる。

「スポーツはわたしを救ってくれた大恩人。皆にとっても希望といえるものなの。それを取り上げようだなんて、絶対に見逃せない！」

ミコトは異星の邪悪な王子を睨み付ける。そのとき、ミコトの全身が七色に輝いた。

ポワッ！

温かく力強い光は、暗く陰鬱な空にまっすぐに伸びて突き刺さる。

目の当たりにした異星人の妖精は、喜びも露わに大声を上げた。

「おおっ！ この子のケンゼンパワーが迸ほとばしってます！」

「わわ！ なによこれっ、わたしっつてば、やたら綺麗に光ってる！」

「聞いてください。今この地球は、あの変態王子……プリンス・アウターの精神力の影響下にあります。本性は邪悪でも、肉体とともに鍛え抜かれた精神は本物。その強力なパワーが地球を覆い尽くしてるわけなのです。だから、地球人のスポーツ好きの心は萎え、疲れるのはイヤ、怠けたいなんていう対極の悪感情が膨らみ、ご覧のありさまなのです」

「ええ！ 地球全部がこんな状態なの！」

「あと数時間も続けば、スポーツに完全な無関心になり、誰もしくなるでしょう」

「そんな！ する人がいなくなったら、滅んだも同じじゃないの！」

「止めたいですよね？」

「うん！」

「止められます。あなたなら」

「ほんと！」

ホイッスルはニッコリ笑った。

「あの変態王子の力は本物ですが、あなたみたいにスポーツを愛する健全な心……ケンゼ

ンパワーが強い者は、抗うことができます。何を隠そう。あたしは、そんな存在とともに、あいつの邪悪な行動を止めるために、あいつを追ってやってきたのです！」

「わ！ 親切すぎる！」

「なんてことありません！ それじゃ、早速変身を！」

「へ、変身ですって！」

「変態王子の精神力が影響しているせいで、今この星は、人間の精神力が強く作用する環境になっています。あなたが光ってるのは心の力が現れているからなのです。それをあなたの力で、悪に対抗するための力に変質させてあげます。それが変身なのですよ！」

「よくわからないけど、わかったわ！ なにをすればいいの？」

「あたしの目の前で運動して汗をかいてください！ 光の心の持ち主が流す清らかな汗……それが、邪悪に打ち勝つ正義の力のシンボルなのです！」

「わわ、ますますわけがわからないけど、マンガやアニメみたいでなんだか格好いい！ それじゃ……えーと……そんなに時間はかけられないし……それっ！」

顎あごに指を当ててほんの数秒思案した後、ミコトはその場で駆け足をした。

健康優良な女子校生が、本気でアスファルトを蹴り続ける音が路上に響き渡り、

「わたしがスポーツを守る！ 宇宙人の王子の曲がった心をたたき直してやるんだか

ら！」

ムッチリとした腿を胸元まで突き上げ、十指の先まで力を込めた両手を肩から大きく振る。真面目な顔をし、強い決意が漲る短距離走のフォームで一生涯懸命に動くミコト。

だが、健康的に熟した若い女体は悩ましかった。

ブルンッ！　ブルンッ！　ブルルンッ！

スイカじみたバストは弾み回り、エンジ色の短パンの巨尻の肉が暴れている。腿が上下する度にめくれる裾からは、太腿の付け根と尻タブの膨らみ始めがはみ出していた。

「わお！　スポーツ美乙女の悩殺肢体が、躍動しまくってる！　最高です！　ハアハア」
ホイッスルはやたら嬉しそうに赤面する。タフなミコトも激しい運動で、流星に火照り始めていた。体育着に押し込められている豊胸の谷間と、純白ハイレグパンティーが張り付いている女子の秘唇——身体で特に蒸れやすい部分に、薄く汗が滲む。

「か、身体が熱い……力がどんどん漲ってる……！」

ピカアアア！

ミコトの全身から溢れていた光が大きく膨張して弾ける。それが変身終了の印だった。

「乙女の汗は平和のシンボル！　健昂優良ビビッド・ガール！」

邪悪を打ち砕く正義のヒロインとなったミコトが見得を切る。



ミコトは赤く活動的なコスチュームを纏まとっていた。

明るく快活な美貌を際立たせるみたいに、真紅に染まったポニーテールの髪留めは、白い羽根飾りに変わっている。

黒い指ぬき部分に続くロンググローブは肘を越え、肩にはフサフサの羽根飾りがついていた。

トップはノースリーブのホルターネックだが、スツキリと引き締まりながら絶妙に皮下脂肪がついたお腹は剥き出しで、縦長のセクシーなおへそが露出している。

腰からは羽のような真紅のマントが伸びているが、フリル付きで女子校生の制服めいたプリーツスカートは裾が短い。白いニーハイソックスで引き締まる、血色よくムッチリした女子校生の太腿が、大盤振る舞いされていた。

足首には金色の輪のアンクレットがついており、靴はアダルトなヒールに変わっている。「……頭に浮かんだ言葉を口にしたけど、我ながら決まったって感じよ……うわ、わたしったら、本当に変身してる！ マンガやアニメの変身ヒロインになっちゃったんだ！」健康な女子校生の魅惑的な肢体を可憐に強調し、それでいて、スポーツ少女らしさのあるコスチューム姿になった自分を見回し、ミコトが感心する。

彼女は感嘆のため息までついて、

「信じられない……今まで経験したことがない位に、視界が鮮明で、しかもなにもかもが光って見える……身体に重さを感じないけど、細胞のひとつひとつが活性化して、力強く躍動してるみたいで……それに、気分がすごくいい！ これならきつとなんでもできる！」

「思った以上にすごい力を放ってますよ、ビビッド・ガール！ 宇宙金メダル級だわ！」
ホイッスルが喜色満面に変身ヒロインの周囲を飛び回る。

七色にグラデーションしている羽は、景気よく明滅していた。

「きつと、スポーツマンガでよくあるゾーンもこんな感じに違うわ！」

ミコトは勝手に断言する。

するとホイッスルは「ゾーンというのがなんだかわかりませんが」と前置きし、驚くべきコトを言ってきた。

「それは丸ごとあなたのパワーですけど、まだまだこんなものじゃありません。まだ出し尽くされていないのが、あたしにはハッキリわかります」

「うそ！ わたししたら、もっと強くなるの！」

「その力はおいおい発揮されていくはずですよ。今はともかく、使えるだけの力で……」

「うん。邪悪なプリンス・アウターをとっちめて、地球からスポーツを奪うなんて馬鹿なことを、今すぐやめさせてみせるわ！」

健 昂 良
優 良
ビビッド
VIVID
GIRL
★
ガール
淫らな体育祭で
寝取られる
淫紋 ヒロイン



第三種目!

Excellent beat VIVID GIRL

**カレとの絆と心のキレツ!
淫らな「ムカデ競争」でナカイキしまくッ!
ネトラレ【淫穴】初体験!**

ドス黒い巨根の輪郭に沿って目一杯円く広がっている生白い秘裂は、太腿を巻き込んでぐっしより濡れて、処女膜が破られた印である真っ赤な筋を垂らしている。

「そういう競技だから考えないようにしてたけど……直接見ることになるなんて……」

一郎が呻く。

淫らな「玉入れ」の一件で、一郎は王子に劣等感を抱いている。

自分よりもオトコとして優れていると認めるしかない男子が、憧れのミコトの処女を奪ったのに、強く打ちのめされていた。

初体験は一生に一度だけ。

一郎がその相手になることは、なくなつたのだ。

よりによって、イケメンヤリチンのハゲ野郎に、先を越されたただなんて。

「一郎……ごめん……」

ミコトがすまなそうに謝ってきた。

なにに対する謝罪なのかはよくわからないが、その態度も一郎の胸を抉った。

ミコトはぜんぜん、嫌がっていない。

友人の話などでは、処女喪失は大変な痛苦らしいが、彼女はケロリとしていた。

それどころか、淫らな「玉入れ」でよがったときみたいになんとも色っぽい顔をして

いる。

目尻を垂らし、頬を艶やかに染め、熱く湿った吐息を繰り返してぼす様子には、なにもかも忘れて押し倒したい衝動に駆られた。彼は前の女子に奥まで挿入しているが、眼中にない。それどころか煩わしいとしか思わない。一郎は吐き捨てる。

「ちくしょう! また王子なのかよ……ミコトの処女を奪えたなんて……処女膜を破られて痛いはずのミコトに、そんなエロ顔をさせるなんて……!」

一郎は射精寸前まで興奮しているが、同時にこの上ない屈辱に震えている。

「けど、今は競技だ……おい、ミコト、王子、すぐに態勢を立て直して走るぞ。復活した後続が迫ってる。ゴールまであと五メートルだからって、うかうかしてられないっ」
うながすと、王子は「うん」と素直に答えた。

ところがミコトは違った。

「も、もう無理!」

金切り声で拒絶する。

「なんだって?」

「わたしもう、我慢できない!」

自分をすっかり立たせるために、スツキリと引き締まったお腹に王子が回してくれてい

たたく遅しい腕に、ミコトは己のそれを重ねた。

迷いなく力を込めて、しがみつく。どういう意味かは明らかだった。

「み、ミコト……お前……！」

「王子くん、この場でわたしを抱いてっ」

セックスのことしか頭になくなったミコトは、切羽詰まった声で訴える。

首を巡らせ顎を傾け、頭の上の彼を潤んだ目で見つめた。

ミコトは学園屈指の人気者。

肉感的な肢体は好評で、一郎などはセックスしまくりたいと思っていた。

さらには今の彼女は、一郎も堪らなくなる位に、強烈な色香を放っている。

その美女子校生に明け透けに迫られたというのに、王子は困った顔をした。

「嬉しいけど、今は競技中だよ。一郎くんとのことだってあるでしょ？」

突き放すが、ミコトは必死だった。

「お願いよ王子くん。もう本当に我慢できないの。王子くんとセックスしたいの」

甘ったるい声でおねだりしながら腰を振る。

大きくて瑞々しくて汗で煌めくナマ尻を、彼の股間に擦りつける。

奇しくも、一郎の前の女子が競技の前にしたのと同じ仕草だった。

相手を受け入れる気持ちと性欲に満ちた、淫乱な所作だ。

昨日までのミコトからはとても想像できない淫乱な姿に、幼馴染みが絶句する。

「あ、あのミコトが……まるでエロビデオみたいなことを……王子なんかにしてる……」

一郎は真っ青で、声が掠^{かす}れていた。

彼の分身は、前の女子の中で一段と漲っている。前の女子は「あん、一郎くんってば、ミコトが他の男子にセックスをおねだりしてるのに、興奮してるのね」と、からかう。だが、一郎もミコトも聞いていない。と、王子がミコトに念を押した。

「このままじゃ、本当に競技に負けちゃうよ?」

「それは……それは困るけれど……」

クラス優勝のためだけでなく、敵によって刻まれた淫紋を消すためにも敗北は許されない正義のヒロインが言葉に詰まる。

だが、立場を自覚したからといって我慢できるほど、性欲は小さくない。

もう、完全に燃え上がっているのだ。

(どうすれば……こんなとき、一郎ならどうするかしら……)

一郎はなにかと頼りになる幼馴染み。

苦しいときや困ったとき、彼のことを思い出し、それで切り抜けたことは何度かある。

(そうだわ！)

発情して鈍りきった思考力の限りに考えて、妙案が浮かんだ。

それは、一郎がつい先ほど女子に言われたことだった。

「い、一回だけ……一回だけお願い、王子くんっ」

「一回……なるほど。一発ハマられてスッキリしたら、すぐ競技に戻るといことだね」

「そうなの、そうなのよっ」

「悪くない考えだね。他のクラスとはまだまだ差があるのだし」

「でしょ？ でしょ？」

他のクラスの様子を見ながら王子が肯定してくれたことで、俄然、やる気になった。

その様子に一郎はわなわな震えていたが、ミコトは気付かない。

彼女はさらに王子にせがむ。

「お願い、本当に一回だけでいいから、セックスしてよ王子くん！」

「そこまで言われちゃ断れないなあ」

王子がニッコリ笑って承諾した。

「や、やったわ……！ とうとう王子くんが、わたしとセックスしてくれる！」

「でも、やるからにはベストを尽くしてもらおうよ。これも、ミコトさんがベストを尽くす

と選手宣誓した、体育祭の競技の延長だからね」

「もちろんよ、なんでもするわ」

承諾してもらったのが嬉しくて、ミコトはさらにお尻を振る。

王子は彼女のお腹に腕を回したまま、腰を振り始めた。

タプンッ、タパンッ、パンッ、パンッ。

筋骨隆々の腕でしっかりと抱きしめ、密着しながら、柔らかい巨尻を下腹で打つ。

ミコトの白く瑞々しい柔肉が、綺麗に日焼けした筋肉の肉体に打ち据えられる度に、彼

女の尻たぶ全体が波打ち、甲高い打擲音が校庭に鳴り響く。

リズミカルにピストンされて、ミコトは甘えるような、すすり泣くみたいな声を出す。

「ああ、んふっ、はああ……ああンン……素敵……」

お尻を起点に全身を揺すぶられるミコトは、満足していた。

（はああ……いい……王子くんってば、やっぱり上手だわ……）

逞しい肉棒の長いストロークで、ほぐれた媚肉は端から端まで抉られている。

張り出したカリ首と粘膜が擦れる度に、膣全体に灼熱の快美が湧く。

新しい愛液がどんどん出てきて、破瓜の血を押し流していた。

（王子くんの逞しいオチンチンが、出たり入ったりしてくれてるの、とってもイイ……）

大いに悦ばせてくれる王子の剛直に思いを馳せる。

ついさつきまで処女だった、ピンク色の粘膜の肉壺を、ドス黒い巨根が出入りしている様子をイメージすると、性感がさらに強くなった。

彼女は、心の底からこう思う。

(ああ……最高……)

自分に女の悦びを教えてくれたペニスに、またもや未知の快楽を体感させてもらっているのは、なんとも不思議な心地よさを覚える。夢見心地のミコトに、王子が呼びかけた。

「気持ちいいかい、ミコトさん」

「気持ちいいわ、王子くん」

「なら、オマンコ気持ちいいって言わなきゃね」

「え……?」

「正確には、ぼくのデカチンとナマセックスして、オマンコ気持ちいい、だ。そうやって、淫らかな言葉を使うことが、競技でベストを尽くすということさ」

「わかったわ王子くん」

性感で思考力が落ち、どうしようもない悦びを与えてくれる王子のなすがままになっていくミコトは、従順に実行する。

「王子くんのデカチンとナマセックスしてもらって、オマンコ気持ちいいわ」

「主語も入れてよ。「玉入れ」のときに言ったように、今度はミコトって、本名でね」

「ごめんさい、もちろん言うわ……王子くんのデカチンとナマセックスしてもらって、ミコトのオマンコ気持ちいいわ」

最後まで口にした途端、ミコトのカラダが一段と火照る。

ムカデ競争におけるかけ声と同じだった。

声に出すことで、その内容が強く意識される。

セックスしている自覚が強まり、興奮が増したのだ。

「ああ……王子くんの言うとおりにしたら、もっと気持ちよくなったわ」

「そのようだね。だって」

キュッ……キユンッ……キュッ、キュッ……!

王子は責め立てる膣に意識を向けた。

待望の巨根ピストンを体感しているスポーツガールの膣は、淫乱に躍動している。

「ミコトさんのオマンコ、ぼくのをすぐく締め付けてる。この絞り方は、精子をねだつてるとしか思えないよ。処女を卒業したばかりで、今は神聖な競技中で、しかもきみは悪と戦う正義のヒロインなのにさ、ちよつと淫乱すぎないかい?」

「ああん、いじめないでよ……王子くんに嫌われたら、わたしはこのムラムラを、どう処理すればいいの？ ぜんぜんわからないわ」

「勘違いしないで。ぼくはそういう女の子は大好きさ」

「本当？」

「可愛いスポーツガールで、正義のヒロインで、皆が憧れるミコトさんの処女をもらえて、しかも完全和姦のラブラブセックスできるなんて、嬉しくてしょうがない。その上、健康すぎて淫乱体質だったなんて、ご褒美すぎるね」

「嬉しい……！」

ミコトはうつとりした目で王子を見つめる。

王子もミコトを見返した。

ふたりは他のことなど忘れて、屋外セックスに没頭する。

そんな中、周囲の学生がひそひそ言い合う。

「マジでおっぱじめてるぜ、あのふたり」

「正義のヒロインのビビッド・ガールでもある輝木さんが、まさか欲望に負けるなんて」

「元々、淫乱だったのよ。「玉入れ」で見たけど、胸に【淫乳】なんて書いてたじゃない」

「落書きかタトゥーかは知らないけど、オマンコにも、あんなのを刻んでるものね」

「こりゃ、言い訳のしようがないぞ。あいつはスポーツガールのフリした淫乱痴女だ」
 皆は蔑んだ目で特にミコトを見る。憧れの気持ちなど、今や少しもこもっていない。

一郎は放心していた。王子のドス黒い剛直を深々と啜え込む、ミコトの生白く濡れそぼつ秘部に釘付けになっている。彼は弱々しい声で、

「ミコト……ずっと一緒だったのに、おれはお前がこんな趣味だったなんて知らなかった……どういふ経緯で、オマンコに【淫穴】なんて刻むオンナになったんだよ……」

健昂優良ビビッド・ガールを破ったプリンス・アウターが股間につけた淫紋は、【淫穴】の二文字だった。

小山のように盛り上がる左右の大陰唇に、【淫】と【穴】の文字をつけ、合わせて【淫穴】という具合である。

文字は、淫らな「玉入れ」で負けたせいで消せなくなった、オッパイの【淫乳】と同じだ。赤い墨をつけた毛筆で、達筆に書いたみたいになっている。その【淫穴】は、

グチョオオツ、ヌプツ、ズプツ、ヌズプウウウ!

王子のドス黒い巨根を背後からひつきりなしに打ち込まれ、粘い水音を放っている。

嬉しそうに食い締めて、しつこく纏わりつきながら、剛直のピストンを受け入れていた。

「ハア、ハア、王子くんの大きなオチンチン、気持ちいいよお、ああ、ミコト、イキそう。

オッパイでイカせてもらえたときみたいな感じが、オマンコにきてるよお」

ミコトは汗みずくであえいでいる。

王子との性交に夢中で、一郎や他のクラスメイトの様子など、ぜんぜんわかっていない。空は爽やかに晴れている。

青空の下、スキンヘッドのイケメンゴリマツチョとのセックスに耽る正義のヒロインの美肌は、ピンク色に染まっていた。

上背のある王子の日焼けした浅黒い巨軀きよくに背後から抱きすくめられ、お腹に巻き付く彼の腕にしがみつきつつ、立ちバックのピストンに、気持ちよさそうな顔をしている。

すっかり骨抜きになっているミコトに、王子は言葉を投げかける。

「なら、オマンコ、イクと言わなきゃね」

「うん、ハア、ハア、ンあああつ、ミコトのオマンコ、イキそうッ」

「その調子だよ。それじゃ、オマンコの頭に【淫穴】とつけようか。そうするともつといい。それが、セックスというスポーツでベストを尽くすということさ。セックスなんだから、日常では絶対に現れない、最高にみつともなくて浅ましい本性をさらけださないと」
平素のミコトならば嫌がったろうが、今はタガが外れている。

言葉巧みに、どんどん淫乱に調教している王子の言葉に、ミコトは従順だった。

逆らう気持ちは少しも起きない。

むしろ、従うことも快樂だった。

「ミコトの【淫穴】オマンコイクつ、王子くんのデカチンとナマセックスしてイクツ」
すると王子は、とんでもないことを言ってきた。

「ふふ。ミコトさんの綺麗な声が蕩けて、下品な言葉をバンバン言うのは最高だね。じゃあ、そろそろ一区切りだ。このまま中に出すね」

流石にミコトは息を呑んだ。

「中に出すって……まさか……」

「もちろん、精液さ。ミコトさんの【淫穴】オマンコの奥に、ぼくの精子を送り込むね」

「ええっ、それは……流石に……だって、わたしたち学生なのに……赤ちゃんができたら」

「ぼくは大歓迎だよ。ミコトさんに妊娠してもらったり、子供を産んでもらえたりしたら、こんなに幸せなことはない」

「え……」

「一郎くんは遠慮して黙っていたけれど、実は、ぼくもきみに憧れる男のひとりだったわけさ。魅力的なきみとセックスしまくりたい、子供を産ませたいという、願望もある」

戸惑うミコトを王子は口説く。

「責任はとるよ。生まれてくる子供のことだけじゃない。ミコトさんが、ぼくにそういう気がなくても、必ずぼくを好きにさせてみせる。自分から、子供を産ませて欲しいと哀願する位、ぼくを愛するようにしてみせる」

「あ……で、でも……わたしには一郎が……ああ……けど……」

「頭でものを考えず、オマンコで考えて。ほら、一番奥で精液を出されながら、どっちを選ぶのが最良か考えてよ。【淫穴】オマンコのミコトさん」

いわゆる立ちバツクの体位で、ミコトをしつかり抱きしめながら、王子は射精した。

ドビュンンッ！ ドビュウウウウ！ ビュルルルル！

何度も突き回した子宮口をドス黒い亀頭の手でぐいぐい押し上げ、淫乱に充血させた粘膜の蜜肉壺を、長く太い自分の形に変えながら、本気で求愛し、子宮と卵子すらも我が物にしようとしていると認めるしかない猛烈な勢いで、精液をぶちまけ、送り込む。

「ひゃあんンン！ 王子くんの熱い精液、ミコトの【淫穴】オマンコの奥で弾けてるっ」
ミコトが叫ぶ。

声音は甘ったるかかった。

普段の澁刺さなど微塵もない、眉目の端がはしたなく下がりがきつた赤面顔で、灼熱の衝動を受け止めている。そうしてミコトは、王子と一緒に思い切り果てる。



健 昂 良
優 良
ビビッド
VIVID
GIRL
★
ガール
淫らな体育祭で
寝取られる
淫紋 ヒロイン



第四種目！

Excellent beat VIVID GIRL

**地球のスポーツを守るより
敵と子作りセックスしたい!?
最後の淫紋!
性欲全開「クラス全員リレー」!**

「いいよ一郎！ そのまま濃いのを子宮に出して、わたしを妊娠させて、一郎だけのオンナにしてっ！」

正義のコスチュームのミコトは、いつそう強く一郎を抱きしめる。

ふたりで身体を揺すり合い、性感を最高まで高めた後に、

ドビユウウウウウウ！ ドビユルルル！ ドビユンンン！

一郎は大好きなミコトへ、念願の膣内射精。

幼馴染みでありながら、今日初めて、分身で具合を確かめた蜜壺に中出し。吸い付いてくる子宮口を押し返ししながら、ぴったりくっついた先端より、熱い精液を放出する。

これまで中出ししてきた十四人の女子の誰に注いだときよりも抜群に濃い熱汁を送り、何億という精子を流し込む。

「うあああ！ ミコトを孕ませる射精気持ちよすぎる！」

ドクンッ！ ドクンッ！ ドクンッ！

正常位で交わるミコトを愛欲を込めて抱きしめながら、十秒、二十秒と、まだ学生だというのに、卵子がいる子宮の奥へ、子種を注ぎ込む。

ミコトは熱烈に応えた。

妊娠をせがみ、一郎のオンナにしてと懇願した正義のヒロインも、一郎に負けない強さ

で抱き返す。変身ヒロインにも、女子校生にも相応しくない下品なガニ股になり、一郎の背中を抱き寄せながら、交差する彼の顔の横で、焦点の合わない蕩けた目をしている。

半開きの口からは「ああ……」という満足そうな、切なそうなあえぎ声が溢れていた。ずるるる……。

気が済むまで射精した一郎は、ゆっくり離れて結合を解いた。

抱き返していたミコトはあつさり彼を離す。

長手袋の両手は横に、ニーソックスにヒールの両足はガニ股にはしたなく投げ出した。

乾きかけの精液で照り光る、九十五センチFカップの巨乳は【淫乳】の淫紋ごと、荒い呼吸に合わせて上下している。

「やった……ミコトのオマンコにたっぷり射精できたぞ……子作り中出しできたんだ……

……！ この【淫穴】マンコは妊娠した……おれのものになったんだ……！」

歓喜する一郎の目の前で、ミコトの秘裂から精液がこぼれる。

ごぼおおお……。

肌や粘膜にへばりつきながら、ゆっくり出ていく。

淫紋をつけられた【淫穴】陰部は、一郎の巨根の形に広がっていた。

濁液はゆっくり垂れ、会陰と太腿に伝っていく。

そこへ、競技進行のサポートをしている、異星の妖精ホイッスルが飛んできた。

「ミコトさんへの膣内射精を確認しました。オーケーです。女子のコンプお疲れ様です」
「なあ、ミコトは妊娠したんだよな？」

同意すれば即座に妊娠するというのがルール。一郎が勇んで確認するとホイッスルは、
「いいえ。ミコトさんは妊娠してません」

「まさか！ ……そんなはずは……」

「妊娠したら、それとわかる変化が男女に起こるんですよ」

「なんだって？」

と、どよめきが起った。

おとおおおおおおおおおお！

側で競っていた他のクラスの男女が、突然、光り輝いたのだ。

ホイッスルが事務的に説明した。

「あんな感じですよ」

「ばかな……なにかの間違いだ……」

「同意はなかったんですよ。口先だけじゃ効果はないんです。大事なのは心でして」
異星の妖精は気の毒そうに一郎を見る。

「おれは間違いない、ミコトを孕ませたいと念じて中出しした……なら……まさか……」
そのときだった。

「王子くんのデカチンでイク！ 王子くんいっぱい出して！ 私を孕ませてえ！」

「ごめん。イカせてオマンコの中で精子出すけど、きみを妊娠させる気はないよ」
そんなやりとりが聞こえてくる。

一郎が見ると、片方はクラスメイトの女子で、もう片方は宙乃王子だった。

この「クラス全員リレー」で男子の最終走者を務める王子が、女子と順番に交わりながら、迫ってきたのだ。

「やあん、妊娠させてえ、王子くんだけのオンナにしてよお」

「妊娠させるなら、心から認めた女性って決めていてね。それはきみじゃない」

女子は甘えた声を出しているが、王子はそっけない。

膣内射精を済ませると、彼女の唇に軽くキスをし、そのまま離れる。

「はあん……王子さまに、オマンコに中出ししてもらえただけじゃなく、キスマでされちゃった……妊娠は断られたけど、しあわせ……」

女子は、ホイッスルが「膣内射精確認しましたー」と告げるのにまったく構わず、今のミコトみたいに、ガニ股で半ばのびている。

「リコのちっちゃオマンコ……もう、王子くんでない満足できないよお……」

「アリサマンコもだよ……王子のデカチンは並みのデカチンとやっぱり格が違うわ……」

「一郎くんもよかったけど、王子くんのセックスは次元が違うよね……」

よく見るとなんと、先頭の女子からミコトの隣の女子まで、全員、同じポーズだった。ガニ股で惚けた顔をし、王子の巨根の形に広がった陰裂から大量の精液を流している。

「な、なんだよこれ……おれとのセックスに満足してくれたクラスメイトが……おれに経験を積ませてくれながら、エロい顔してよがってた女子全員が……おれとやったときにはしなかったドエロ顔になってる……しかも、おれより王子の方がいいなんて侮辱してる」

一郎はショックでガックリと膝をついた。

そこへ王子がやってくる。

「そこをどいてくれるかい一郎くん。次にミコトさんとオマンコするのはぼくなんだよ」

ビクンッ！　ビクビクビクッ！

振り返りすぎて、見事に割れた腹筋にくっついていてる王子の分身は、女子たちの愛液の雫を飛ばしながら、獰猛に痙攣している。

「あ、王子くん」

なんと、彼の姿を認めるなり、ミコトも一郎をせかした。

「一郎、王子くんに早く場所を譲って。でないと、競技に負けちゃうわ」

「ミコト……お前……」

彼女の言い分はもつともだが、どこか冷たく、よそよそしい。

まるつきり、邪魔者扱いだ。

ミコトはもう、一郎を見ていない。

王子の巨根に流し目を送っている。

「はやくどいてよ一郎。あなたは好きだけど、セックスを邪魔されたらたまらないわ」

信じられないことに、ミコトの声には苛立ちすら混ざっていた。

4

（大好きなはずの一郎とのセックスも、こんなものなの……？）

地球からスポーツをなくそうとする異星の王子と戦う正義のヒロイン、健昂優良ビビッ

ド・ガールこと輝木ミコトは、困惑と落胆の気持ちを抑えられなかった。

話は少し遡る。

体育祭の最後の種目が始まる直前、彼女は敵であるプリンス・アウトターとの戦いで不戦敗になってしまい、背中になんらかの淫紋を刻まれた。

クラスが勝てば、オッパイの【淫乳】、オマンコの【淫穴】も消してくれるという雪辱戦に臨んでいるところである。その開始の合図が、異星の妖精ホイッスルによって、

『説明は以上です！ 各クラスの皆さん、バトンはありませんが、若い性欲と生命力漲る性器によって、どうぞひとつに繋がってください！ それでは第一走者の男子さん、始めてください！』

ミコトの協力者だが、今は保身のために敵に従っている、ホイッスルの競技開始の合図が響いた。

競技は「クラス全員リレー」。本来は文字通り、クラスの全員がバトンを繋いで走る競技なのだが、敵によっておかしくされている。

体育着を首までたくしあげてオッパイを露出するだけでなく、短パンとパンティーを脱いで、オマンコまで丸出しにする格好で仰向けに寝て、いわゆるM字開脚で男子を受け入れるという具合なのだが、ハイソックスと運動靴はそのままだった。

常識で考えれば、女性を辱める下劣な出で立ちとポーズであるが、仕掛け人のプリンス・アウターの干涉によって、正義のヒロイン以外の皆は真つ当な競技と思い込んでいた。

競技に参加するミコトも、ビビッド・ガールのコスチュームで、同じようにしていた。赤を基調とした衣装の袖なしホルターネックのトップを首までたくしあげ、【淫乳】と

いう赤く達筆な淫紋がついた、九十五センチFカップを露出している。

もちろん、マントとスカートとパンティーも脱いでいる。

肉付きがよく、いわゆる「モリマン」である、こんもりした秘唇は露わとなっていた。その左右につけられた【淫】と【穴】、合わせて【淫穴】の淫紋は、薄汗を纏って妖しく光っている。

頭の後ろで手を組んで、仰向けM字開脚のポーズとなり、大事な部分をさらけだしている具合だが、両腕の赤いロンググローブと、白のニーハイソックス、それに、鈍く輝くアダルトな黒いヒールはそのままだった。

「ぶひひ……いい格好だな、輝木……いや、健昂優良ビビッド・ガール。いかにも、敗北しましたって姿じゃないか。負けて辱められる正義のエロボディヒロインって感じだぞ」侮蔑を込めて言ってきたのは、敵のプリンス・アウターではない。

クラスメイトの男子だった。

男子の第一走者を務める彼は、途中にいる十四人の女子のひとりひとりに膣内射精をし、アンカーのミコトの下へ辿り着いたのだ。

お腹の肉で体育着をパンパンに張らせている彼は、露出しているペニスも張り詰めさせていた。

意外にも陰毛を処理している股間からは、成人男性の平均よりもやや小ぶりで、皮は白くて、亀頭は赤くピンク色の逸物が、愛液と精液をまとって斜めにそそり立っている。

「豚野くん……」

ミコトが相手の名前を口にする。

第一章の途中で登校しているミコトのグループと合流したり、第二章の淫らな「玉入れ」で彼女とのパイズリ射精を堪能したりした、でぶの男子である。

「まったく、輝木には騙されたよ」

「わたしが騙した……？」

「タトゥーか落書きかは知らないけど、オッパイとオマンコに、【淫乳】、【淫穴】なんて刻んでるだろうが。登校してからそんなことをする暇はないはずだから、家を出るまでにつけてたに違いない」

「そ、そんなことは……」

「黙れよ、変態痴女！」

「へ、変態痴女ですって……！」

「違うのかよ。けど、オッパイとオマンコに、赤い字で派手に【淫乳】や【淫穴】なんて書くかつけるかした上で、俺に『ベストを尽くすのが大事』、『一緒に気持ちいい汗かこう』、

なんて立派なことを言ったり、皆を代表して選手宣誓したりしたんだぞ？　これを変態痴女と言わずして、なんと言うんだ！」

「う……」

読者をご存じの通り、豚野と合流したときや、選手宣誓をしたときには、ミコトの女体のどこにも、淫紋はなかった。ましてや、進んで刻んだものではない。プリンス・アウトアとの戦いに敗れて、つけられてしまったのだ。

しかし、事情を知らない豚野は、自分の想像が真実だと信じ込んでいる。

それは、強い語気と、ミコトを見下した目つきでわかる。

本当のことを話しても、納得してくれずには思えない。

しかも、今は競技中なのだ。ちらりと見れば、他のクラスは着々と競技を進めている。競技に勝てばプリンス・アウトアは敗北を認め、淫紋のすべてを消し、地球から手を引いてくれるという。負けられない戦いで時間を浪費するなど、あつてはならない。

（今は誤解を解くよりも、競技を進めなくちゃ……）

不快すぎる誤解だが、ミコトは腹を括った。

豚野に話を合わせて、こう言う。

「じ、実はそうなの……わたし……オッパイやオマンコに淫紋をつけるのが趣味で……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

学園天使

School Angels Twin Safety

ツインセーフティ

ヤウ子DK怪人 卑劣な寝取り調教作戦

悪の怪人から学園を守る全校生徒の希望の星「ツインセーフティ」として活動する元気いっぱいな女の子桃ももかと知りで優しい女の子青葉さやか。狡猾な怪人はそんな2人をもくもく化し、学園全体を絶望の力で支配するためエッチな罠を張り巡らせる！ 輪姦奉仕、寝取られ、公開処女喪失で悪に助けていく変身ヒロインと学園の未来はどうなる？

小説：木森山水道

イラスト：洗面きぬ子

各電子書籍サイトにて好評配信中！

電子書籍限定の二次元ドリームノベルズが登場！

ボリュームたっぷりでお送りします。

表紙はもちろん、描き下ろしモノクロイラストも収録！



元女騎士は新人スパイ

小説：木森山水道
イラスト：風丘

性豪オークの極悪性具を奪い取れ！！

クビになった元女騎士はスパイになつてもカラダを駆使して世を正す！？

聖騎士がソープ嬢に転職!?

エッチの腕を磨いて魔王暗殺を目指すTS英雄譚！

女体化 聖騎士セヴロス

小説：木森山水道
イラスト：河野雅夫

